

現代絵画の煮えたつ源泉



アドルフ・ゴットリーブ
『絵文字 No.4』
(一九四三年)

初めて紹介される 抽象表現主義の形成期

岡田 隆彦

おかだ たかひこ 詩人、美術評論家。
造形大学助教授。詩集に『史乃命』『生きる喜び』など。美術論集に『危機の結晶』『日本の世紀末』など。一九三九年東京生まれ。慶応義塾大学仏文学科卒。

制作された動機や着想の内容が少しずつ了解されてくる。

およそ一九五〇年代から、フランスに代わってアメリカが、世界の美術における主導的な役割を果たすようになった。それまではほとんどの関心がヨーロッパに向けられてきたが、アメリカに抽象表現主義が起ってからはアメリカの現代美術の動向に強い関心が向けられるようになったのである。その後、新しい抽象、ポップ・アート、ミニマル・アート、コンセプチュアル・アート、ハイパー・リアリズムといった動向が、世界中から注目されてきた。こうしたアメリカ現代美術の真に現代的な確立をもたらした抽象表現主義は、ジャクソン・ポロックや

ヴァイルム・デ・クーニング、マーク・ロスコなど代表的な画家の作品とともに、五〇年代以降の展開に限ってわが国にも紹介されてきた。しかし、それがどんなふう形成されたのかは、まったく知られていないといっている。

このたび開かれた「アメリカ現代美術の巨匠たち——抽象表現主義の形成期35」展は、表題にある通り、アメリカ現代美術にとって最も重要な抽象表現主義が形成されつつあった時期の作品を展観するものである。これによって、この動向を理解する上で欠落していた部分をうめることができよう(七月一二日ま

で、東京・池袋・西武美術館)。

ポロックやデ・クーニング、アール・ゴッキーといった、わが国で比較的に深い画家たちの仕事は、未見の作品に接してもとまどうことはないが、他の画家たちの場合は、おそらく大半の観客が意外な発見にとまどうことだろう。とりわけ若い世代は、かれらが深い関心を寄せているアド・ライン・ハートやマーク・ロスコ、ハンス・ホフマンといった画家たちの作品を見て、よく知られている抽象的な作風とまったくちがうのに驚いてしまふだろう。だが、かれらの前抽象表現主義ともいふべき自己形成中の作品をじっくり見てみると、その後の作品が

この展覧会は、これまで名前を挙げた画家のほかに、アドルフ・ゴットリーブ、リー・クラズナー、ロバート・マザーウェル、バーネット・ニューマン、リチャード・プーセット・ダート、テオドロス・スタモス、クリフォード・ステイル、ブラッドリー・ウォーカー・トムリンをふくむ、あわせて一五人の約八〇点で構成されている。これはすでに、ニューヨーク州イサカのコネル大学ハートバード・F・ジョンソン美術館で開かれたものだが、日米友好基金の好意で日本にもたらされた。このあと秋に、ニューヨーク市のホイットニー美術館で開催される。テーマをはっきりと打ち出し、制作



マーク・ロスコ『埋葬』(1946年)

時期を限って、焦点を絞った展観として、同展は見えたえのあるものとなっているが、一五人のほとんどが名実ともに大作家となっているだけに、こんなふうに作家が一堂のもとに会することはめったにないだろう。その点でも貴重な展観だ。ここでなら、一五作家の相互影響を比較対照することができるし、なによりも、さまざまな靈感源から生じたイメージが絡みあい、せめぎあう坩堝のごとき様相を見ることが出来る。

一九三〇年代末あたりから、アメリカの、とくにニューヨークに住む一群の若い画家たちが、それまで支配的だった芸術上の頑固な地方主義や社会主義リアリズム、あるいは一時代まえのヨーロッパを皮相にとらえたモダニズムなどをのりこえようとして模索しはじめる。かれら

に大きな刺激を与えてそのように促したのは、カンディンスキーの芸術論やミロがオートマティックに表出する生物形態的なイメージ、すなわち無意識界につながるアミーバのような形象であり、キュービズムだった。これらを有力な契機とし、アメリカ大陸に土着する文化にもめざめながら、かれらは次第にアメリカ独自の美術をかたちづくっていった。その形成過程全体は、いかにもアメリカらしい多様性のダイナミックな統合を示しているかもしれない。なかでも、かれらがオートマティスムに学んだ自由な自己表出によって内部世界を掘りおこすと同時に精神性を追求し、そうすることで、常識的な絵画観が要求する技巧や美しさを突き破り、これまでになかった種類のリアリティーに到達したことは注目される。

たとえばホフマンは、カンディンスキーを賛美して、かれは非具象性を幾何学的幻想の領域にまで至らしめたといひ、ポロックは、ピカソとミロにふれて、芸術の源泉は無意識にあるとする考え方に感動したと書いている。ほかに多くの画家たちが、カンディンスキーが最も重視した「内的必然性」に強く刺激されて、自発的な表現による精神性の結晶化という課題に取り組んでいる。そういうえば、「抽象表現主義」という呼称自体が、はじめはカンディンスキーの作風を指して使われたのだった。かれの抽象的でしかも表現主義的な両義的な性格が、アメリカ独自の風土と環境でいつそう拡